

# 心理臨床家のためのレヴィンの遺産

## I. 基本の考え

筑波大学心理学系 台 利 夫

The Lewin legacy for the clinical psychologist I. The basic idea  
Toshio Utena (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The theoretical characteristic of clinical psychology, especially group psychotherapy, has to be sought in the history of modern social and personal psychology. Cognitive experience of client in a given environment has been a main subject of contemporary psychotherapies. Clinical psychology owes to Lewinian theory much of its basic understanding of the cognition-life space of client. This article gives first an account of direct and indirect influence of Lewinian idea on the concrete problems of the person who has to do with the environment.

Key words : cognition, environment

### はじめに

精神病院で病棟生活上、実質的に患者を指導し処遇するのは看護婦である。また病院勤務の臨床心理士が日常業務で接触するのも看護婦である。そこで、機会を得て精神病院の看護婦に精神科医師と臨床心理士の違いについて質問すると、臨床心理士は医者の指示で心理テストや面接を行なう人であると答えるか、または違いを感じはするがよくわからないと言うのが殆どである。

精神科医についてはどうか。臨床心理に理解のある精神科医を想起しよう。理解があるとはどういうことを意味するか。たとえば心理テストや集団心理療法を患者に有用とみなし、臨床心理士が自分の判断でこれらの仕事をするのを認め、診断についても心理士の意見にある程度耳を傾ける医者であるとしよう。しかし時間がとれて、心理テストも集団心理療法も医者自身がやればどうか。心理士の存在価値が問われるだろう。恐らく活動の外面だけをとれば、医者に限らず、現在臨床心理士が行なっていることで他の職種の人々看護婦やソーシャルワーカーや作業療法士が出来ないことは何一つ無いだろう。実際、臨床心理士なしに済ませている精神病院は幾らもある。

本質の問題は、ある仕事が誰には出来るが誰には

出来ないというような事ではなく、専門家としてその仕事に取り組む人の特定の学に基づく視点の違いなのだ。そして臨床心理士については心理学を学んできて、それを役立たせるべく精神病院に勤めているわけである。むしろ臨床心理士もあらためて医学を学べば医者の資格は得られるし、医者でありながら心理テストをやっても今のところ違法ではない。だが、その時、医者は同時に臨床心理士である（その逆も成立つ）から基本的態度に照らすとアイデンティティの問題が生じるだろう。

本論は、終局的には、精神科医が臨床心理士の専門性について妥当な認識を持つための一つの手がかりとなることを目指している。実際、精神科医療の領域で勤務する臨床心理士にとっては医者の理解・支援さらには推奨なしに専門家として活動するのは不可能である。だがそのためには、臨床心理士の専門性をまず臨床心理士自身が明らかにすることが必要である。少なくとも当面の目標は臨床心理士のために置かねばならない。ただし筆者はこれまで集団心理療法をもって現場に参加してきたので、特にその角度から専門性を論じるものである点を明記しておきたい。

精神科の看護婦に対するごく通俗的な解説から入っていこう。それはとりあえず心理臨床が精神医学の一部門でなく心理学を活用するものであること

を強調すれば足りる（むしろその独自性は後述しなければならない）。心理臨床家は何よりも患者自身の考え方、感じ方、周囲に対する観方…体験を理解することを接近の基礎にする。これらはまとめて個々の患者の認知の仕方と呼べるだろう。そして人間の認知の一般的原理—心理学的構成概念を念頭におきながら、そこからそれぞれの患者の認知を理解し、それに基づいて新しい行為を導き出す。

心理学的概念は極めて広義なものであり認知の理解の仕方はパーソナリティや社会的態度の問題にも関係してくる。たとえば、半盲の人の悩みは彼が普通に見える人と全盲の人のどちらからとも周縁的 marginal であることに因る面が多い。青年の悩みは成人と児童のどちらからとも周縁的、アメリカのユダヤ人の悩みはいわゆる WASP と非白人のどちらからとも周縁的であることに因るのであり、これらすべては周縁的という点では同じである。この周縁的な人—周縁人は自らの行動・態度の拠り所となるべき準拠集団をもたない点に特徴があるが、それはまた自分の周囲の環境を秩序あるものとして認知できるような内的な枠組の基盤をもたないことでもある。つまりパーソナリティの内的分化にとまとう自我の中核の脆弱を現すものとされる。こうした人間の捉え方は現に眼の前に具象的に身体を現して問題を訴える患者に向かうことを前提にする医者とは見かけでは同様なことをしていても出発点から異なっている。

この立場に対してある種の医者は「実体のない、実証性のない概念や理論が患者にとってどれだけ役に立つか」と批判するかも知れない。だが、医者である Freud の超自我や無意識は実体ではない。彼がたとえ生物学主義者であったとしても彼の理論の半ばはすぐれて心理学的である。したがって重要なことは構成された概念や理論がどこまで患者の問題の解決に役立つかということである。

単に認知という働きに止まらず、それを社会的な人間の在り方—周縁人に関連づけて解釈したのは Lewin, K. をはじめとして場理論を唱えた人々である。場理論は複雑な人間の心情や行動をどこまで体系的に把握できるだろうか。このきわめて一般的・包括的な理論をもって個別的・実際的な問題に応じることができるだろうか。もしそれが可能なら場理論は心理臨床にとって特に有力な理論的素地を与えることになろう。かくして、本論のねらいは Lewin を中心にその遺産を確め、系譜を追いながらこの点をできる限り追求し、検討することである。

Lewin 自身は心理臨床の実践をしたことはなかった。だが、Lewin 並びに彼の後継者（その中には心理

臨床家もいた）の研究の足跡を現在の臨床の視点から追うと今日の臨床心理学がいかに大きくその影響を受けているかが明瞭になる。またそのことから精神医学とは異なる臨床心理学の特性がいかに多く Lewin の遺産に負っているかが知れるだろう。

いうまでもなく、Lewin については既に多くの著書や解説書が公刊されているが、視点を変えることで従来の紹介とは異なる面が照射され別の知見も得られるだろう。ガイドブックに従った名所への旅も“私”が行けば“私”の名所になる。Lewin の理論への諸批判も顧みながら、臨床の実践と思考を通じてこの理論との整合性を保ちながら不十分・不鮮明なところを見直し、新たな概念を補添することを試みよう。

## 人と環境の間

行動 (B) は人 (P) と環境 (E) を含んだ全体事象 (S) の関数 (f) である  $[B = f(P \cdot E)]$  という Lewin (1935) の方式は周知の通りである。この場合、環境は人の認知を基礎とする心理的環境であって人の外に在る物理的・地理的環境ではないし、人 (P) も心理的環境と共に同時に全体事象をつくっており、いわゆるパーソナリティとして独立に指定されたものではない。人の側よりいっくらか環境の側に力点をおくとはいえ Koffka (1935) のいう行動環境も心理的環境と類似している。それらはともに犯罪学者 Mezger (1951) が、犯行は素質規定的 (a) であつ発達規定的 (e) な人格 (P) と人格形成的 (P) であつ行為形成的 (t) な環境 (U) の相互作用  $(V = aPe \times pUt)$  としたような、客体化された要因間 (通例いわれるような人対環境) の関係とは異なる。上記の全体的事象は生活空間 life space と呼ばれた。また、Lewin の場理論でいう場—どのような行動を生じるかを力学的に示すもの—もほとんど生活空間と同義である。トポロギー的表現では行動の場の領域の分化と人の内部領域の分化が相い応じるが、行動の場では人と目標の関わりにおいて要求や誘意性の概念、また人については緊張を担った諸領域—中心層と周縁層と知覚・運動領域 (境界領域) という区分を行っており、対応しながらもアプローチの違いにより特徴的な構造がつくられている。こうした生活空間の概念に対して心理臨床の側から特に注意されるのは以下のような点である。

第一に、心理的環境という考えは物理的・地理的環境に対する人の認知面を強調している。これは個々の人の独自の体験につながるものである。またこれは同時に行動面に関しても当てはめられ、行動

は統計的に捉えられて法則化されるべきではなく、一つの行動に一つの法則があるという。

第二に、行動の因果的説明を排し、所与の場の条件発生的分析によって明らかにしようとする。これは現代の非精神分析的な心理療法で支配的な「今、ここで」の考えに近い。そして第一の事柄と第二の事柄は密接に関連している。

第三に、Lewinのいう“境界boundary”とは一般に人の内部の領域と領域の間の隔壁についていわれるが、“境界領域boundary region”という人が外部環境に直接に触れながら事物を認知し、関わりつつ行動するところであり、いわゆる自我境界にも関連する概念である。以上を顧みると、Lewinの考えは人の体験を中心におき、それを構成する生理的・物理的・社会的等の諸条件を行動の解明から出来るだけ排除していること。“現在”を強調し歴史的背景は現在に収められるものとしていることが明らかである。さらにもう一つ指摘すべき点は、数学的なトポロジーをモデルにしてすぐれて抽象的・形式的な理論を展開しながら個々の人の認知や行動の独自性をとりあげていることである。

だがLewin理論には若干の問題点がある。その中でとくに心理臨床の立場から注意を要する点を取り上げてみたい。その一つは、“境界領域”の概念である。これは人が環境と関わる場所であるが、人の側からすると一方の極には幻覚が想定され、他方の極には物それ自体への限り無い接近がありえよう。しかしBrunswik (1943) も示唆するように、境界領域は環境の側からすると限り無く認知に関わりない物から限り無く関わりある物にわたって考えられる領域でもあるから、物それ自体の心理への影響をみないではいられない。さらに言えば、現実認められることであるが、天災や交通事故など物理的・地理的環境が人の行動に直接影響する場合を場理論の上でどう説明するのであろうか。

ここで場の考え方に傾斜しながらも行動理論を取り入れて環境を論じたTolman (1932) のマニピュラタという概念を取り上げよう。これは物はそれ自体に使用されるべくあるような特性を具えているという考えである。この考えは後にLewin賞を得たBarker (1968) の行動セッティングの概念にも似ている。これは行動を起させやすい場面ないしは「しつらえ」とでもいうものである。これらの考えは要するに、一方に使用したり操作したりする人がおり他方に使用されるべくある物があって両者が関わり合うというものであり、人の要求や認知と環境の間を巧みに相い応じさせたと言えるだろう。だが両者は何時でもどこでも相い応じるわけではない。また

マニピュラタや行動セッティングは統計的に明らかにされるのであり、他方、人の側についてはすぐれて個別的な心理をとり上げざるをえないからこのマッチングも決定的な問題解決にはなっていないのである。まず個別的認知を重視する臨床心理学では、これらの見解を押えた上でなお個人の側から環境に迫る立場をとらねばならない。

Barkerの行動セッティングに応ずる人の側の心理はおそらくLynch (1960) のパブリックイメージに近似するものであろう。Lynchは都市のイメージについて物理的現実に対応するものとして、個人的イメージはしばらくおいて、まずパブリックイメージを捉えることに主眼をおいた。他方Lewin (1951) は個人の生活空間とともに集団の生活空間なるものを彼のいわゆる集団力学に応じて唱えている。これはLynchのパブリックイメージに近い概念だが、集団はそれ自体が個人にとって環境であるし、集団心理も環境になりうるものである。ここで重要なのはそれが多少とも物理的・地理的環境とも直接に関わり合う面をもっていると思われる点である。例えば、集団の大きさ—集団の人数は集団成員の物理的な自由運動空間を規定し、メンバーの全体の心理的安定に関わってくるということが認められている。この場合の心理的安定とは行動と環境の変容を媒介とする個人心理と集団心理の双方に関わることであろう。たしかに集団の生活空間は個人のそれよりあい昧な概念ではあるが、ある意味で場理論がさらに環境に向かって開かれるべきものとして一層の検討を要することを裏書きしている。

この点について集団力学者の一人、Festingerの研究を顧みよう。Festinger (1951) は第二次大戦後、大量の復員軍人のために新設した団地—Westgate Westの住人に対するソシオメトリックテストを通じ、彼等の私的コミュニケーションが建物の一階と二階をつなぐ階段の位置により、また棟と棟間の道路によって大きく規定されること、こうした私的疎通がやがて特定の規範をつくり出し、さらに諸種の情報もこれを経路として流れることを見出した。この研究は建物や団地の物理的構造とソシオメトリックな選択が関連することを統計的に示した。Mercer (1979) はこの研究における建物の構造による選択の規定という連関をその後の諸研究の結果に基づいて否定している。だが、ある個人は特定の階段や道路を歩いていって他の特定の人に出会い、語り、情報を伝えるのであり、身体的に物理的環境と関わることなしには他の人を認め、好み、その関係を保とうとすることは不可能なのである。

Westgate Westの研究結果はFestingerのもう一

つの研究—認知不協和理論 (1957) と本来どのような関わりであろうか。特定の個人が特定の道路や階段を認知し、特定の他人を認知して相互にやりとりしてやがて特定の規範をつくり出すということは同時に他の社会的・物理的選択の可能性を棄て、特定の情報を選びとって関係の枠組を固定してそれに従って生活する過程でもある。つまりこの研究は個人の認知不協和・協和を具体的な生活集団の形成と維持という、より広い領域で捉え直し、それに基づいて物理的環境と個人の認知の関係を把握しようとしたのではないか。

おそらく Festinger の趣旨はもっぱら建物によって行動が規定されると述べることにあるのではないだろう。Westgate West の居住者は建物の配置による行動への物理的影響を自分達にとって独特なやり方で有意義なものとして受取ったということである。つまり環境の人への影響と人による環境への影響 (人が環境をどう認知するか) の関係を還元主義的にどちらかを負因として強調したり単なる両者の相互作用として論じるのではなく、環境の影響が現実だとしても時々刻々のその影響に必ずしも人の側からの認知の仕方をとり上げたのであろう。

こうした事情はもう一人のゲシュタルト理論親和者 Heider (1958) の POX モデルにも見出すことができる。ここではある人 (P) が他人 (O) が環境 (X) を認知するように認知できるかどうかは環境そのものの特性によることが述べられ、環境の影響を認めながらも主な視点をもっぱら人の認知によってどこまでそれに接近できるかにおいている。たしかに Csikszentmihalyi (1981) が示唆するように人が物に与える意味は人と人が相互に与え合う意味よりも相対的に恒常性が大きいだろう。だがそれにもかかわらず認知を基礎的視点とすれば所与の場での固有の意味づけがなされるかが主題になる。したがって他の同様な建物の居住者が違った行動をとったとしても、建物の影響とは別に居住者のその影響への意味づけの違いを現すのであるから、それは Mercer の批判のように Festinger の研究の価値をおとしめるものではないだろう。

以上を要するに、Festinger の研究は個々の住民のそれぞれの出会いは個人の生活空間のあり方を、建物と統計的に関係づけられたソシオメトリックな結びつきは集団の生活空間を現していると考えられる。これは実体としての環境と人の関連を問うているのではなく、本質において、人—環境関係に対して人の認知の側からの接近を示したものである。したがって Mercer の言うように、建物による選択の規定と集団内コミュニケーションを別々に捉えて、それ

ぞれに論じているのではなく、最終的に重要なのは集団の生活空間としてのソシオメトリックなコミュニケーションとそれに基づく社会規範であったのである。統計的に捉えられた建物の構造とコミュニケーションの関係は、観察事実を理論と結びつける事態 (Lewin, 1951) として物理的規定の特定の可能性を示したもので、もともと集団の生活空間を個々人の建物の認知と同時過程的な他者認知—出会いに基く個人の生活空間との媒介として仮定したのであると思われる。

このことは Lewin の心理学ひいては心理臨床の掘るべき心理学がどこまでも認知から出発し、認知に重点をおくものであることを示したと言える。ここでは人と環境の関係そのものを論じきれないという意味で心理学の限界が示されたわけであるが、そのことはまた心理学の独自性—心理臨床家にとっての専門性を現すものであると言えよう。

## 引用文献

- Barker, R.G. 1968 Ecological psychology. Stanford : Stanford Univ. Press.
- Burunswick, E. 1943 Organismic achievement and environmental probability. *Psychological Review*, 50 (3) 255-272.
- Csikszentmihalyi, M. 1981 The meaning of things. London: Cambridge Univ. Press.
- Festinger, L. et al. 1950 Social pressures in informal groups. N.Y.: Harper & Row.
- Festinger, L. 1957 A theory of cognitive dissonance. Evanston: Row, Peterson. 末永 他 訳 1965 認知不協和の理論 誠信書房
- Heider, F. 1958 The psychology of interpersonal relations. N.Y.: John Wiley & Sons. 大橋 訳 1978 対人関係の心理学 誠信書房
- Koffka, K. 1935 Principles of gestalt psychology. N.Y.: Harcourt, Brace.
- Lewin, K. 1935 A dynamic theory of personality. N.Y.: Mc Graw-Hill. 相良・小川 訳 1957 パーソナリティの力学説 岩波書店
- Lewin, K. 1951 Field theory in social science. N.Y.: Harper & Brothers. 猪股佐登留 訳 1955 社会科学における場の理論 誠信書房
- Mercer, C. 1979 Living in cities. Harmondsworth: Penguin Books. 永田 訳 環境心理学序説 新曜社
- Lynch, K. 1960 The image of the city. Cambridge: MIT press. 丹下 他 訳 1968 都市のイメージ

ジ 岩波書店  
Mezger, E. 1951 Kriminologie. Munchen: C.H.  
Beck.

Tolman, E.C. 1932 Purposive behavior in animals  
and men. N.Y.: Century.

—1989. 9 .30受稿—